

## モンテーニュの教育思想

北村 浩一郎\*

### La Pensée d'éducation chez Montaigne

Kouichirou KITAMURA

#### 要 旨

深刻な状況にある今日の教育問題は、単なる教育技術的な対応や何かひとつの教育施策で解決されるような単純な問題ではない。したがって、その問題は、いろいろな学問の総合的観点から根本的に検討され、その解決策が究明されなければならない。ここでは、その一環として、モンテーニュの教育思想の形成過程を明らかにしながら、彼の教育の目的、方法、内容を手がかりにして、その今日的意義を問い、21世紀の「教育」の在り方を考察する。

キーワード：判断力の育成、徳性の涵養、節制、生活体験、生きる力

#### はじめに

今日のわが国は、高度に文明化され、人々は大変快適で便利な生活ができるようになった。しかし、その一方で、わが国の教育問題は極めて深刻な状況にある。最近マス・メディア等でしばしば話題になる学力低下の問題だけではなく、児童・生徒の問題行動等もその質、量ともに重大な局面にあり社会問題化している。

しかも、それは単に学校教育の問題だけではない。年間3万5千件以上と推計される幼児虐待問題に象徴されるように、子育て、家庭教育上の問題も深刻である。その背景には、核家族化や少子化の進行、仕事中心のライフ・スタイル、親の無自覚、過保護や放任等々による家庭の教育力の低下が考えられる。

また、地域社会でも、都市化、過疎化、核家族化等の結果として、地域社会の連帯感の希薄

---

\*教授 哲学・倫理学・生涯学習学

化が進み、地縁的な地域社会の教育力の低下もしばしば指摘されている。

学校も単に学力低下の問題だけではなく、校内暴力、いじめや不登校を始め様々な問題を抱えている。このような教育の現状を踏まえて、「教育の在り方」がいろいろと広く検討され、議論されてきた。文部科学省も各種審議会等を通して教育の在り方を検討し、実践もしてきた。しかし、今日までその教育問題の際立った解決、改善は見られない。

いうまでもなく病理現象とまでもいわれる今日の教育問題は、価値観が多様化したこともあって、何かひとつの教育施策または教育思想で一朝一夕に解決され得るような単純な問題ではない。したがって、その問題は、いわゆる教育学的観点からだけではなく、いろいろな学問の総合的観点から根本的に検討され、その解決策が究明されなければならない。ここでは、その試みの一つとして近代教育論の祖とされるモンテーニュの教育思想の形成過程を明らかにしながら、その目的、方法、内容を手がかりに、各種の教育施策が拠って立つべき教育の根本に論及し、「教育」とは何かについて、またその在り方について根本的に考察を試みてみたい。

## 1 モンテーニュ自身が受けた教育

まず、モンテーニュの教育思想形成の大きな要因とされる彼自身が受けた教育について検討してみたい。

通称モンテーニュと呼ばれるミッシェル・エイケム・ド・モンテーニュ (Michel Eyquem de Montaigne) は、裕福な新興貴族の御曹司として、1533年、南フランスのペリゴール州モンテーニュの城館で生まれた。彼の父ピエール・エイケム・ド・モンテーニュは、帯剣貴族としてフランス軍のイタリア遠征に参加した。そして、彼は、そこでイタリアのルネサンス運動を見聞し、その時の諸体験が、息子ミッシェルの教育方針の決定に大きく作用したとされる<sup>i</sup>。

父ピエールは、息子を立派な跡取りに育てるためにその教育には大変熱心であった。

まず、ミッシェルは、当時の慣習に従って、生後まもなく領内の貧しい農家に里子に出された。その際、彼の父親が狙ったことは、ミッシェルが最も貧しい普通の暮らしに慣れること、庶民と同様に運命が自然の掟の下で子供を陶冶するのに任せること、生活習慣によって粗食と艱難に馴らすこと、さらに領内の下層の人々への結びつきと愛情を育むことなどであった<sup>ii</sup>。

ただ、このような父親の狙いがあったにもかかわらず、ミッシェルの里子生活は、2年もしくは2年半で終わったようである<sup>iii</sup>。通常、2年間ぐらいでは上記のような狙いは達成され難いと考えられるが、とにかくミッシェルは、里子生活によって「逞しい健康の基礎」と「農民はじめ下層の人々への親しみの感情」を身につけながら<sup>iv</sup>、素朴でおおらかな自然環境の中で

2年余を過ごすことが出来た。

一方、かつて遠征先のイタリアでルネサンス運動を目の当たりにしたことのある彼の父ピエールは、その間に、学識と良識のある人々に、優れた教育方法について可能な限り学んだ。特に、彼は、その要職にあったボルドー市のグエイエンヌ学院の教師達と、エラスムスの『児童早期自由教育論』について検討を重ねたとされる<sup>v</sup>。エラスムスの体験的教育論である同上書には、関根秀雄氏が指摘するように「できるだけ早期に statim 幼児にラテン語を口うつしに教えこむこと、あらゆる規律強制から離れて伸び伸びと自由に liberaliter 少年を教育すること」<sup>vi</sup>という二つの柱がある。それは、早期に実施される「直接教授法」と「自由教育」である。

やがて、里子生活を送っていたミッシェルは、モンテーニュの城館に連れ戻され、当時のヨーロッパでも画期的といわれる上記の斬新なエラスムス式教育方法でラテン語の教育を受けることになる。まず、父ピエールは、ラテン語に堪能な、しかしフランス語の全く分からないドイツ人家庭教師ホルスタヌスと助手2名を雇い、3歳に満たないミッシェルにラテン語の教育をはじめた。そして、その際、家族も召使たちもラテン語以外でミッシェルに話し掛けないように厳命されていた。したがって、彼は乳幼児がごく自然にその母国語を学ぶようにラテン語を学んだのである。

当時の学校教育が鞭と規則で強制的に行われていたのに対して、彼は、「方法なく、教科書なく、文法も規則もなく、鞭もなければまた涙もなく、私は、私の学校の先生が知っておられるのと寸分ちがわな純正無雑なラテン語を、学び得た」<sup>vii</sup>としている。このようにして、きわめて早期から家庭教師によって直接的にしかも自然で自由なやり方で、当時の国際語でかつ学術公用語であったラテン語の教育が、ミッシェルに施されたのである。また、彼がギリシア語を学んだ時も、同じように遊戯や運動の中でごく自然にそして興味関心を掻き立てられながら自由に学ぶことが出来たのである。もっとも、ミッシェルにとって、ギリシア語は、ラテン語のように身に付かなかったようである。

このようにして、ミッシェルの幼児期の教育は、彼の父によって、ミッシェルが他の誰かの意志によるのではなく、彼自身の望みによって学問や義務を味得するように、ミッシェルの心を極めて温和にそして自由にし、また厳格さや拘束なしに行われたのである。しかし、このようなエラスムス式の教育は、ミッシェルにラテン語の力を身に付けさせたけれども、一種の行き詰まりを生じることになる。しかも、それは、ミッシェル自身によると、彼の父のせいではなく、彼自身の根本的な性格によって生じたのである。つまり、「まったく私は頑丈で完全な健康とともに優しい素直な天性をもってはおりましたけれど、それでいて一方かなり鈍く、弱く、かつぼんやりでございましたから、人は私を無為から引きはなすことができなかつた…

そして、この鈍い性質の底に、大胆な思想と年に似合わぬませた考えをもっていました。しかし私の精神はのろうございました。それは連れてゆかれる所までしかとどきませんでした。理解はのろく創意はよわく、それになんと言っても信じられないほどに記憶力が欠けていた…こう数えあげて見れば、父がここからめぼしい何物をも引き出しえなかったというのも、驚くにあたりません」<sup>viii</sup>と彼は述べている。要するに、このような性格を持つミッシェルには、エラスムス式教育では目立った成果が得られなかったというのである。しかし、モンテーニュ研究者達が指摘しているように、このエラスムス式ラテン語早期教育は、単にラテン語を学んだというだけではなく、後の思想家としてのモンテーニュに多大の影響を及ぼしたのである。ラテン語を学ぶことによって、「彼はそこで思索家夢想家たる修業をした」<sup>ix</sup>のである。特に、上の「大胆な思想と年に似合わぬませた考えをもっていました」という行を、思想家、モラリストとしてのモンテーニュの原型と捉える研究者もいる<sup>x</sup>。

やがて、彼の父は、ミッシェルがさらに古典をよく読みこなしその精髓を学び取るためには、彼のラテン語に一層磨きをかけなければならないこと、またミッシェルが優れた教師によって前途有為な人物に育成されなければならないことに気づき、それにまた彼の父がイタリアから持ち帰ったエラスムス式の教育を薦めてくれた人々が周囲にいなくなったこともあって、彼はミッシェルを世間一般の習慣に従って学校に入れることにする。かくして、6歳になったミッシェルは、コレージュ・ド・ギユイエンヌ学院に学ぶことになる。

当時のギユイエンヌ学院は、ミッシェル自身が「フランス第一の名校長」<sup>xi</sup>と称したアンドレアス・グヴェアヌスによって経営され、ルネサンスのユマニズムの理想に則ったフランスで最もよいとされたラテン語教育中心の学校であった。教師の中には優秀な人材が多く<sup>xii</sup>、「青春の牢獄」と言われた当時の学校では一般的であった体罰も禁じられ、充実した教育が行われていたようである。その上に、ミッシェルが「父のとった心遣いには何一つ欠けたところはありませんでした」<sup>xiii</sup>と言うほど、彼の父はさまざまな配慮をし、復習のための実力のある家庭教師をつけたり、当時の学校のしきたりに反するいろいろな特別待遇を得たりしている。このようにしてミッシェルは、名実ともに充実したギユイエンヌ学院で学寮生活を送ることになる。それは、外見的に見れば、誰もがうらやむような至れり尽せりの学寮生活である。

しかしそれにもかかわらず、彼は「それはやはり学校でございました」と不満を述べ、そこではラテン語の力が退化したこと、モンテーニュの城館で受けた新しい教育も初級クラスではなく2～3学級飛び級したこと以外は何の役にも立たなかったことを挙げ、13歳で全課程を修了しても「今日これと言って取りたてて自慢できるような結果は、何一つない」と述懐している<sup>xiv</sup>。エラスムス式の早期自由教育でラテン語を学び、ラテン語については最上級生よりもよ

くできるが日常のフランス語についてはよく分からないミッシェルは、ギユイエンヌ学院のカリキュラムや校則によく馴染めず、いわば「不適應」の状態に陥ったのではないだろうか。

ただ、ミッシェルは、7～8歳のころ、オヴィディウス（43 B.C.～A.D.17頃 ローマの大詩人）の『変身譚』の寓話の面白さに触れて読書に興味・関心を持つようになった。当時、彼は他のすべての遊びを避けて、しかも普通の子が関心を持つような騎士物語や武勲詩には目もくれず、そのラテン語の本を読みふけていた。そして、その読書のために、彼は学院で定められた他の学科の勉強をなおざりにしたと述べている。

通常であれば、彼のそのような勉強態度は、厳しくとがめられるところであるが、幸いなことに彼は一人の物わがりのよい教師に出会い大目に見てもらって、ヴェルギリウス（70 B.C.～19 B.C. ローマの大詩人）、テレンティウス（195 B.C.頃～159 B.C. ローマの喜劇詩人）、プラウトゥス（254 B.C.頃～184 B.C. ローマの喜劇詩人）などの作品やイタリア喜劇を、その内容に魅せられながら、次々に読み進んだ。もしその教師が、彼のそのような読書を中断させていたら、ミッシェルは他のほとんどすべての貴族達と同様に、学校から書物に対する憎悪の念だけを持ち帰っただろうとしている。ミッシェルにとっては有り難いことに、その教師は、人目のつかないところでは自由に読書をさせ、規則で定められている学科の勉強は、義務としてやるように優しく仕向けたのである。いずれにしても、上述のようにミッシェル自身は、13歳で同学院のすべての課程を修了しても何の成果も得られなかったと言っているが、彼のこのような旺盛な読書が、後のモラリスト、思想家としてのモンテーニュの形成に有益であったことは言うまでもない。特に、彼の教育思想の形成過程においては、石堂常世氏が指摘しているように、「彼の深い古典的教養は、教育目的の規定に働いている」<sup>xv</sup>のである。実際、彼のギリシア・ローマの古典に関する素養は、彼の教育思想の大きな形成要因をなしている。

以上のような特色のある教育を、幼・少年期に受けたモンテーニュ自身は、「教育」もしくは「教育の在り方」についてどのように考えているのだろうか。次に、彼の教育思想が目指す「教育の目的」、「教育の方法」、「教育の内容」について論及しながら、彼の教育観を明らかにしてみたい。

## 2 モンテーニュの教育観

### 1) 教育の目的について

モンテーニュが教育論において「判断力の育成」と「徳性の涵養」を中心テーマとしたことは、よく知られている。確かに、モンテーニュの主著『エッセー』そのものが、何よりも彼自身

の判断力の試み<sup>xvi</sup>とされることから分かるように、彼は、判断力を極めて重視し、知識そのものよりも重要だと考えている。彼によると、「わたしにおいては判断が主人の席を占めている。少なくともそうあろうと懸命に努めている」<sup>xvii</sup>のである。

そして、判断力をともなわない知識は何の役にも立たないし、それどころか危険であるとしている。つまり、彼にとっては、「知識も判断も共に必要であるけれども、そして、それはふたつながらそろっていなければならないけれど、なんととっても、本当に、知識の貴さは判断の貴さに及ばないのである。後者は前者がなくてもすむが、前者にはどうしても後者がなくてはならない」<sup>xviii</sup>のである。そして、判断力をともなわないような「知識は危険な剣である。力のない、これを用いる術を知らない、手の中にあるならば、それはかえってその人を妨げ傷つける」<sup>xix</sup>とされるのである。どんな知識も、判断力のない者にとっては、有害で危険でさえあるとみなされている。

さらに、賢明な判断をするためには徳性の涵養がなされていなければならない。徳性が身につけていなければ、善し悪しの適切な判断はなされ得ないのである。その限りでは、判断力にとって、徳性は不可欠であり、その前提となる。彼の場合は、判断力と徳性の涵養は、表裏一体の関係にあり、むしろ、前者が後者を含意しているのである。

そして、モンテーニュは、このような判断力を身につけることは極めて困難であるために、子どものころからそれを育成すべきだと考えている。というより、彼によると、教育の目的そのものが、知識を多く授けることより、判断力を育成することでなければならないのである。モンテーニュは、子どもの教育を論じたところで、「彼の教育、彼の勉学は、ただただこの判断を作るため」<sup>xx</sup>にあると述べている。つまり、子どもに対する教育は、単なる物知りではなく、立派な判断力を備えた有能な人物にすることを目指さなければならない。実際、教育の目的は、立派な判断力を身につけ、立派に生き、立派に死ぬことのできる人物を育成することにある。

さらに、モンテーニュは、その教育の大事さと共に難しさも指摘している。彼によると、「人間の学問の中で最も困難で大事なものは、この子供らの躰と教育とをどうすべきかということ」<sup>xxi</sup>である。そして、彼は、まず当時の教師達の教育方法に問題があるとしている。つまり、「我々が受けたようなああいう教育の仕方では、先生や生徒が、より博識にはなってもより有能にはならない」<sup>xxii</sup>とされる。また、子供の親達にも問題があり、「父兄の心遣いと費用とは、ただただ我々の頭の中に学問を詰め込むことばかりをねらっている。判断や徳操に至ってはほとんど問わない」<sup>xxiii</sup>と嘆いている。世間でも、立派で賢明である「善良な人」よりも多くの知識を身に付けている「学問のある人」が注目され、尊敬されている。しかし、「問うべきこ

とは、誰が『最もよく知るひとか』で、『最も多く知るひとか』ではない<sup>xxiv</sup>のである。さらに、モンテニユ自身が「我々はただ記憶を一杯にしようとばかり励む。そして良識も良心もからっぽにしておく。…なんと驚いたことに、この愚かさはわたし自らのしていることにそっくりだ<sup>xxv</sup>」と自己批判をして反省している。

このように教育といえば、教師も親も世間もさらにモンテニユ自身さえも多くの知識を記憶させることと考えてきた。しかし、それは、上述のように、愚かなことであり判断力を伴わない知識は危険なことでさえある。子どもが判断力と良心を持ち、「よく生き得るようにすること」が教育であり、教育の目的そのものなのである。

それにもかかわらず、教育をそのように知識を多く記憶させることと理解することは、古今東西を問わず、従来からの一般的な傾向である。したがって、そのような当時の教師や親達さらにモンテニユ自身が直面した諸問題は、実は古くて新しい問題であり、今日の教師や親達にとっても依然として問題のままで、なんら解決されてはいない。

今回の「学習指導要領」の改訂に当たって話題になった、記憶している知識の量を学力とする旧来の「学力観」と「生きる力」を学力とする「新しい学力観」をめぐる議論も、後述するように正に同様な問題を含んでいるのである。このように教育の問題は、モンテニユ自身が云うように「最も困難で大事」（前出）な問題なのである。次に、教育の方法という視点に立って、教育の在り方を検討してみたい。

## 2) 教育の方法について

上にも明らかにしたように、当時の学校教育で行われていた鞭や体罰による強制的教育方法をモンテニユが否定したことはいうまでもないが、子どもを教育するに当たっては、苦勞と不安に満ちたいろいろと細かな心遣いをしなければならない。まず、モンテニユは「子供を両親の膝もとでそだてるのはよくない<sup>xxvi</sup>」とする。それは、両親の子どもに対する自然本来の情愛が、往々にして、子どもを甘やかすからである。つまり、彼によると、最も賢明な親でさえも、子どもの過ちを罰することも出来ないし、また逆に子どもが立派になるためにいろいろな厳しい努力をし続ける姿を見守ることに耐えられないからである。教育の場で、親が子どもをかばいすぎるのは良くないのである。

そこで、子どもの教育にとって最も大事なことは、まず、立派な教師を選ぶことである。モンテニユによると、教育の成果全体がどのような教師を選ぶかにかかっている。したがって、その教師は慎重に選ばなければならない。

それでは、教育の成果をあげるためには、どのような教師を選ぶべきなのだろうか。彼によ

ると、教育はただ単に博識である人物ではなく有能な人物を育成しようとするわけだから、何と言っても「よくみたされた頭 (tête bien pleine) よりもよくできた頭 (tête bien faite) をもった指導者」<sup>xxvii</sup>つまり単に多くの知識を身につけた教師よりも品性や良識を備えた教師を選ぶべきである。そして、その教師が、従来からのやり方ではなく、当時の新しい方法で教育する時に素晴らしい効果が期待できるのである。

当時の教師は、多くの場合、子ども達の耳に向かって「まるで漏斗に水でも流し込む」ように叫び、知識の断片を詰め込もうとする。そして、子ども達はそれをただ復唱し、記憶するだけにとどまる。モンテーニュによると、教師は、まずこの点を改めなければならない。教師は、始めからその子どもの能力に応じていろいろな体験をさせ、物事を自分で吟味し、識別するように、ある場合には道を開いてやったり、ある場合には子ども自身に道を開かせたりしなければならないのである。つまり、教師は「最初からその預かった子どもをその力に応じて独り歩きさせ、物事を独りで吟味し選択し識別するように、ある時はこちらから道を開いてもやれば、ある時は彼自らにこれを開かせもするようにしてもらいたい」<sup>xxviii</sup>というのである。実際、教師の役割は、知識を教え込むのではなく、子どもの自主性を尊重しながら、子ども自身の体験による学習を支え、子どもが行き詰まった時に手助けをすることなのである。

教師の典型とされるソクラテス (470 B.C. ~ 399 B.C. 古代ギリシアの哲学者) やアルケシラオス (315? B.C. ~ 241? B.C. 古代ギリシアの哲学者) は、いつもまず弟子達に話をさせ、その後で弟子達に話し掛けたとされる。教師は、まず子どもに自分の先を走らせ、その走り具合によって子どもの力量を判断し、どの程度までレベルを下げるべきかを定めなければならない。この子どもの力量と教師の定めるレベルとの釣り合いをうまく取らないと、教育はすべてうまくゆかないのである。しかし、この釣り合いをうまく取るということは、極めて困難なことであり、「弟子の子供らしい歩調にあわせて彼を導くことができることこそ、高い、そしてきわめて強い、靈魂にして始めて出きること」<sup>xxix</sup>とされる。教育は、真に力量のある教師により、子どもの興味・関心や力量に応じて、子ども中心に進められるべきなのである。

そして、そのようないわば児童中心主義的立場から、彼は、以下のようなやり方で、子どもに対する教育の成果を確認しなければならないとしている。つまり、教育の成果は、昔からよく行われてきたように、教えたことを言葉で反復させるだけではなく、またそれについての子どもの記憶を確認するだけではなく、教えたことの意味や本質を子どもに説明させ、そして子ども達が実際の生活の場でどのような利益を得ているかを判断しなければならないのである。さらに、教師は、子どもにいま学んだことをいろいろな面から考察させ、いろいろな問題に適應させて、彼が学んだことを本当によく理解し、自分のものになっているかどうか、「対話」を

しながら判断しなければならない。要するに、教師は子どもが学んだ内容を自分のものにして  
いるかどうかを、子どもの言葉による説明や記憶によってではなく、子どもの生活体験をもと  
に「対話」しながら判断しなければならないのである。

さらに、子どもが学んだことを自分のものにする上で大事なことは、すべてを篩にかけて、  
何事も単なる権威や信用だけで信じ込まないよう教えなければならない。モンテーニュによる  
と、当時最も権威のあったアリストテレスの原理、ストア派やエピクロス派の原理も、子ども  
にとっては疑う余地のない「原理」であってはいけないのである。子どもに対してはいろいろ  
な判断を示し、子ども自身が可能な場合はその中から選択をするし、そうでない場合は、疑問  
に思うままにさせておくのが良いのである。

クセノフォン（430 B.C.頃～? 古代ギリシアの軍人、著作家）やプラトン（427 B.C.～  
347 B.C. 古代ギリシアの哲学者）の思想も、子ども自身が自分の思考の中で思い描くならば、  
子ども自身のものである。彼らの思想の原理だけでなく、感じ方や考え方も自分の中にしみ  
込ませることによって、子どもは彼らの思想を自分のものにできるのである。モンテーニュは、  
この点を説明するために蜜蜂の比喩を挙げている。つまり「蜂蜜はあちらこちらの花からかす  
め取ります。けれども後にこれで蜜を作ります。この蜜はもう立派に彼ら蜜蜂のものでござい  
ます。それはもう立麝香草でもマヨラナ草でもないのでございます。同様に、ひとから借りて  
来た章句を、彼は変形し混合して、それで全く自己の作品、すなわち彼の判断を、作り上げな  
ければなりません」<sup>xxx</sup>とモンテーニュはいう。このようなやり方で、子どもが学んだことを  
自分のものにし、判断力の育成と徳性の涵養を図るのがまさに教育なのである。

モンテーニュの教育の方法は、「優しさの中に厳しさをこめておこなわれる」やり方である  
が、当時の学校教育のように体罰と強制によって主に教師の言葉を記憶させるのではなく、子  
どもの自主性を尊重しながら、子どもがその生活体験をとおして学んだことを自分のものにす  
るのを支援するというやり方である。

このような教育思想は、19世紀末から20世紀初頭にかけて大きな教育運動として出現する  
児童中心主義教育の立場である。石堂常世氏も指摘しているように、モンテーニュの教育論に  
は、「子どもの自主的判断力を培うべく、教師主導型教授法が反省され、生徒の歩調に合わせて  
生徒を導くことの重要性、生徒の力に応じて程度を加減すること、質問に応じてやることな  
どの必要性が述べられているが、古くはソクラテスに通ずるこの教授法は、…中略…18世紀  
のルソー（Jean-Jacques Rousseau, 1712～78）、20世紀の新教育論者たちの先鞭をつけるもの  
であり、児童心理学上も評価されてよい」<sup>xxxi</sup>のである。実際、児童中心主義の思想的先駆者  
は、一般に18世紀のルソー（1712～78）や19世紀のフレーベル（1782～1852）とされるが、

モンテーニュは、既に16世紀後半にその考え方を明快な形で打ち出している。

このような方法によって、判断力と徳性を涵養する際どのような内容が取り上げられるべきなのであろうか。次にモンテーニュの教育の内容について検討してみたい。

### 3) 教育の内容について

教育によって判断力の育成や徳性の涵養を目指す場合、どのような内容を用いれば良いのだろうか。まず、モンテーニュによると、「人間の判断は、我々が世間と繁く交わることから、あの驚くべき明察を養われる」<sup>xxxii</sup>のであるが、彼は、特に歴史書を通して、今より良かった時代の偉大な人々との交わりを勧めている。そして、「歴史こそ、私の考えるところでは、もろもろの科目の中で最も我々の精神が、いろいろな程度に[すなわち深くも浅くも]うち込むことができる科目」<sup>xxxiii</sup>とされている。したがって、歴史は子どもの理解力に応じて、いろいろな教え方が可能なのである。

ただ、歴史を教えるといっても、従来のように歴史的出来事の年月日を覚えたり、歴史上の人物やその生没年を暗記したりするのではなく、歴史的事実の意義を検討し、「判断」することを学ばせなければならない。つまり、「もろもろの史実を覚え込ますよりはそれらを判断することをお教えください」<sup>xxxiv</sup>というのである。具体的にいうと、「カルタゴ破滅の日付よりもハンニバル<sup>xxxv</sup>とスキピオ<sup>xxxvi</sup>の心情を、マルケルス<sup>xxxvii</sup>がどこで死んだかと申すことよりも彼がそこで死んだことがなぜ彼の義務にかなったかと申すことを、学びとらせなければなりません」<sup>xxxviii</sup>とされる。

したがって、歴史を学ぶ場合には、その学ぶ人の目的や力量に応じて様々な解釈がなされ、理解がなされうる。モンテーニュは「私はティトゥス・リヴィウス<sup>xxxix</sup>のうちに、他の人が読みえなかったいろいろの事柄を読み取りました。プルタルコス<sup>xl</sup>にいたっては、私がそこに読みえた以外に、いや、ひょっとすると作者自身がそこに置いた以外に、更にたくさんの事柄をそこに読み取った」<sup>xli</sup>としている。現に、リヴィウスの著書を読んでも、ある人にとっては、単にギリシア語の文法の勉強にとどまるし、別の人にとっては、哲学的な分析をして人間の本性の最も難解な部分を解明するまでに至る。歴史を教える際には、教師は、ただ単に子どもに史実を覚えさせるのではなく、子どもの力量に応じて、歴史的人物と対話をさせ、その人物の生き方・在り方まで検討させ、人間の本性にまで遡るよう深く掘り下げさせなければならない。そうすることによって子どもの「よく生きるための判断力」が育成されるようになるのである。

また、モンテーニュが子どもに教える内容として重要視しているのは、哲学である。まず、

ソクラテスが自分の出身地を問われた時に、「アテナイ」とは答えずに「世界だ」と答えたという逸話を引き合いに出しながら、モンテーニュは、ソクラテスの思想が広大な視野に立っていて、全世界を自分の町と考え、知人、対人関係、愛情を全人類にまで広げているとしている。そして、そのように広い視野をもって物事を見ることのできる人だけが、物事の正しい評価ができるというのである。

モンテーニュは、具体的に「その心の中に我々の母たる自然がその莊嚴の相を完全に現わした、その偉大なお姿をまざまざと思い見る者…そういう自然のお顔の上に、あのように普遍で絶えまない変化をよみとる者…そういう自然の変化の中に、ただ自分ひとりのみならず、王国全体をも、きわめて細い針のひと突きほどに見てとる者…そういう人であってこそ、始めて物事をその正しい大きさにおいて計り知る」<sup>xiii</sup>と云っている。ここに示されている自然観もしくは世界観は、関根秀雄氏も指摘しているように<sup>xiii</sup>、モンテーニュ自身の世界観であり、それは、彼の教育論だけでなく彼のすべての思想を基礎付けているものである。このような大きな世界こそ、「我々が自己を正しく知るために覗き込むべき鏡」<sup>xiv</sup>であり、子どもの「教科書」としてふさわしいものとされるのである。ここには当時の書物中心主義教育に対する批判と彼の実物教授法の姿勢が、窺われる。

いずれにしても、この大きな世界を「教科書」として、品性と良識を身につけた教師のもとで教育されることによって、子どもは健全な正しい判断力を身につけるようになる。実際、この世界を覗き込み広い視野に立って自己を正しく知ることによって判断力が育成されるのである。つまり、「多くの意見、学派、判断、学説、法律および習慣のあることが、我々にわが国のそれらを健全に判断することを教える」<sup>xv</sup>し、またそれらのことが、「我々の判断に、その不完全さと本来の微力とを認識するよう教える」<sup>xvi</sup>のである。確かに、世界中にある多くの国々の興亡や国運の盛衰を見れば、自国だけの運命に決して驚いてはならないことが分かってくる。

しかし、このような立場にたつことは、決してなまやさしいことではない。したがって、個々の事例には、あらゆる哲学上の有益な理論を当てはめてみる必要がある。哲学はあらゆる人間の行為の試金石である。「実にこの哲学にこそ、人間の行為はすべて、試金石にこすりあわせるように、こすり合わされなければならない」<sup>xvii</sup>のである。子どもに哲学的な諸問題を教えることによって、彼の正しい判断力の育成がなされるのである。

したがって、モンテーニュによると、子どもの判断力を真に育成するためには、「知るとは何か、知らぬとは何か。学問の目的は何であるべきか。勇気、節度、正義とは何であるか。野心と吝嗇、隷従と臣従、わがままと自由との間には、一体いかなる差異があるのか。どんな標

識によって人は本当の堅固な満足を識別するか。どこまで死や悲痛や恥辱を恐るべきか。…中略…

どんな原動力が我々を動かすのか。何が我々のうちのあんなに雑多な衝動の原因であるのか。」<sup>xlviii</sup>といった哲学的問題を教えなければならない。そうすることによって、子どもは、自分の品性と判断を整え、自分自身を知り、立派に死に、立派に生きることを学ぶのである。このようにして、子どもの健全な正しい判断力の育成や徳性の涵養がなされるのである。

モンテーニュは、哲学を「自由科の諸学芸の中でも、真に我々を自由にする学芸」<sup>xlix</sup>とした上で、人生とは何かそして如何に生きるべきかを教えるのに、直接また専ら役立つ学芸であるとしている。しかし、哲学は、当時の分別のある人々にとってさえ、空虚な名前だけのそして何の効用も価値もないものとされ、まして子どもにとっては、近付き難いしかめ面をした恐ろしいものであった。だが、モンテーニュによると、それは大変な誤りで、哲学は、本来陽気なそして快活で面白いものであり、そうでない場合は、哲学がそこに宿っていないことを現わしているのである。しかも、哲学を子ども達が近寄り難いものとみなすことも大変な間違いである。真の哲学は、大人にも子どもにも、身近なものとして、賢愚を問わず教えられうるのである。

そして、哲学を学んだ精神は、その健全さによって、肉体まで健康にするし、安らかさと喜ばしさをその外部にまでもたらすのである。実際、「哲学は靈魂の暴風を晴らすのを…中略…飢えた者や病める者に笑うことを教えるのを、その職としている」<sup>1</sup>のである。石堂常世氏も指摘しているように、モンテーニュの「哲学は世人一般が考えているようなしかめっ面をした生命なき学問ではなく、『生きることを教える』愉快な学問」<sup>2</sup>なのである。

このような哲学は、結局のところ、「徳」を目的とし、徳性の涵養を目指している。ただ、ここでいう「徳」は、学校で教えられているような「けわしい凸凹の近づき難い山のとっぺんに立ってはいません。ひとたびそれに近づいた者は、むしろそれは豊かな花咲く野辺のただなかであって、そこから万物を眼の下に見ていると信じております。しかも人は、この在りかさえ知れば、木陰涼しく緑の草の敷きつめた花の香しき道をたどって、愉快に、天国への坂道はこうもあろうかと思われるばかりに楽で滑らかなだらだら坂を経て、そこにいたりつくことができる」<sup>3</sup>のである。この「徳」は、モンテーニュによると、自然を道案内人とし、好運と快樂とを同伴する「徳」であり、最高の、美しい、意気揚々とした、情愛のある、優しくて同時に勇気のある「徳」であり、更にとげとげしさや、不愉快さや、恐怖や、束縛と相容れない、それらを公然の敵とする「徳」<sup>4</sup>である。

子どもの教師は、子どもの心を、このような徳に対する尊敬の念と愛情で満たしてやらなけ

ればならない。真の徳の価値と崇高さは、それを実行することが容易で、有益で、快適であるということにあり、したがって、大人も子どもも、単純な人も利口な人も、それを実践することができるのである。徳の達人であるソクラテスは、特別の努力をすることなく、自然で容易な仕方徳を育てている。

モンテーニュによると、「徳はもろもろの人間的快樂を養う母」<sup>liv</sup>である。その徳は、それらの快樂を適正なものにすることによって、確実に純粹なものにする。それらの快樂を「節制する」ことによって、徳はそれらの香りと味わいとを残すのである。それは、退けるべき快樂を切り捨て、われわれを是認されるべき快樂の方へ向かわせ、自然が望む快樂をわれわれにすべて十分に与えるのである。要するに、その徳は、いろいろな快樂を適性に節制することによって、われわれの自然に即した人間的快樂を十分に豊かにもたらすのである。

モンテーニュの徳は、富むことも強力であることも博識であることもできるし、また生を愛し、美や名誉や健康をも愛する。しかし、その徳本来の役割は、適正な判断によって、それらのよいものを「適度に用いる」ということであり、また必要な場合は、それらを毅然として捨て去るということである。このような徳の働きは、苛酷というより気高い務めで、それが無いとわれわれの「生命の流れはいたるところで不自然になり混乱し変形する」<sup>lv</sup>のである。

以上によって明らかなように、モンテーニュのいう哲学は道徳哲学であり、その道徳の本質は、「節制」であるということが分かる。かつて、プラトンが正義、知恵、勇気、節制の四つの徳を上げ、四元徳としたのに対して、モンテーニュが「節制」を徳の本質として提示したことは、いかにも彼らしい生活に密着した、そして体験と結びついた実践的な徳だといえる。彼の哲学は、われわれに生き方を教える学問であり、道徳的判断、善悪の区別を教えるのであるから、大人も子どもも学ぶべきものである。

世間一般では、大きくなってからどう生きるかという哲学が教えられがちであるが、それは子どもの時から教えられるべきである。子どもには、牢獄のような学校ではなく、日常生活のあらゆる時間に、あらゆる場所で、哲学を学べるようにしておくべきである。哲学は、子どもの判断と品性を形成する主要な教科であり、子どもの「万事に関与する特権をもっている」<sup>lvi</sup>のである。

そして、子どもに、彼をより賢く、よりよくする事柄を教えた後で、論理学、自然学、幾何学、修辞学を教えるとよいとされる。それは、その子どもはすでに判断力を身につけているから、どの学問を選んででもすぐに会得できるからである。

さらに、モンテーニュは、子どもの身体を鍛錬しなければならないとしている。つまり、「子どもの靈魂を鍛えるだけではたりません。その筋肉をも鍛えてやらねばなりません」<sup>lvii</sup>と

いう。筋肉を鍛えることによって、子どもが、労役にも耐え、苦痛にも耐え、いろいろな苦しさつらさに耐えうるようにしなければならないというのである。これは、モンテーニュが幼少年期に過保護に育てられたことの反省でもあるが、乱世の社会でうまく適応して生きるためには、単に精神のみならず、その肉体が頑丈であることも大切な事柄であったのである。そして、授業と同様、生活体験の一環として行われるならば、遊戯や運動も立派な勉強の一部になることができる。また、競争、仕合、音楽、舞踏、狩猟、乗馬、撃剣等も皆そうである。このようにして、彼は身体を鍛錬することの大事さも訴えているのである。

要するに、モンテーニュの教育論が目指しているのは、上述したように、主に「判断力の育成」と「徳性の涵養」と「身体の鍛錬」であり、結局のところ、それらは、「よく生きること」を志向しているのである。しかも、それは、子どもの自主性と興味・関心さらに生活体験に基づいて自由に成し遂げられるべきだとされている。これは、石堂氏が指摘するように、「ロックからルソー、そしてデューイ、さらに広く、今世紀前半の児童心理学や生理学的基礎に立つ新教育論者たちを結ぶ線上の始点」<sup>iviii</sup>に位置付けることができる。その限りでは、まさにモンテーニュは、近代教育論の祖なのである。このような教育思想が今日どのような意義があるかを、次に検討してみたい。

### 3 モンテーニュの教育思想の今日的意義

はじめに指摘したように、わが国の教育の現状は、いろいろな問題を抱えており、青少年の問題行動だけを取り上げて、相当に深刻な状況にある。そして、21世紀になって社会の変化はますます激しさを増し、人々はその変化に適応していだけでも並大抵ではない。また、国際化、情報化、少子・高齢化が急激に進む中で、人々の価値観が多様化し、教育のあり方は、極めて難しい状況に在る。しかも、上述したように家庭や地域社会の教育力は、だんだんと低下する傾向にあり、学校自体も時代の変化に対応しきれない面が出てきている。

このような中で、わが国では、中央教育審議会が、1996年に「21世紀を展望した我が国の教育のあり方について」という第一次答申を行った。それは、「子供に[生きる力]と[ゆとり]を」という副題が示すように、21世紀の教育のあり方として「ゆとり」の中で、子ども達に「生きる力」を育むことが基本であるとしている。そして、その「生きる力」は、家庭・学校・地域社会が互いに連携して、社会のあらゆる場で育成されるべきだとされている。

この「生きる力」は、これからの変化の激しい社会を「生きる力」であり、「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力」であ

り、また、「自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性とたくましく生きるための健康や体力」である。

このような「生きる力」には、三つの要素があり、それらは、「確かな学力」と「豊かな人間性」と「健康・体力」である。勿論、「確かな学力」というのは、基礎・基本となる知識や技能のほかに、上述のように、課題発見の能力、自主的な学習能力、思考力、主体的な判断力、行動力、問題解決能力であり、その中心となるのは、やはり子どもの主体的な判断力であろう。また、「豊かな人間性」というのは、自らを律し、他人と協調して、他人を思いやる心や感動する心である。これは、子どもの生き方・在り方に関わるものであり、道徳の問題と関係してくる。「健康・体力」というのは、言うまでもなく、21世紀の激動する社会の中で、たくましく生き抜くための健康・体力である。

このような「生きる力」は、従来の「知識の量」としての学力に替わる新しい「質的な学力」とされ、この「生きる力」を育成することが、これからのわが国の教育の中心になるのである。この「生きる力」を育むために、今回の「学習指導要領」の改定に当たって、体験的な学習、問題解決的な学習を行う「総合的な学習の時間」が創設された。

このような「21世紀を展望した我が国の教育の在り方」を振り返ってみると、「判断力の育成」と「徳性の涵養」と「身体の鍛錬」を目指すモンテーニュの教育論とあまりにも共通点が多いのに驚かされる。つまり、「確かな学力」は、「判断力の育成」を中心としているし、「豊かな人間性」は、「徳性の涵養」と深く関わっている。また、「健康・体力」は、文字通り、「身体の鍛錬」によって増進され、変化の激しい時代には特に重要なことである。このように比べてみると、中央教育審議会の第一次答申が、まるで、モンテーニュの教育論に即してなされたかのような錯覚に陥ってしまう程である。

実際、ここでは「実にモンテーニュは、20世紀初頭の新教育論者たちの諸見解を先取りしているかのようである」<sup>13</sup>という石堂常世氏の指摘に加えて、わが国の中央教育審議会の第一次答申を先取りしているようであると言っても過言ではないだろう。16世紀のモンテーニュの教育思想が、今日のわれわれにとってもなおかつこのようにフレッシュであるということは、彼の教育思想の普遍性を根拠付けるものだと思われる。

上記答申について、白石克己氏は「これからの学校像の基本として『生きる力』の育成を掲げた点は画期的である。人生をいかに生きるか、という問いと学校における教育が無関係でないことを明言しているからである」<sup>14</sup>と評価しているが、確かに、文明化が高度に進み、社会の変化が激しくなればなる程、ますます便利で快適な生活ができるようになるかもしれないが、人間としての人間らしい生き方、生きがいのある生活は、だんだんとしにくくなるのである。

そういう状況の中で、今回の答申のように、教育の中で人間の生き方を問うというのは極めて意義深いことである。

最近ようやく、生涯教育・学習の領域でも、この「いかに生きるか」というテーマを正面から取り上げるべきだという主張が出てきている。例えば、白石克己氏は「生涯にわたって統合された教育は時系列にわたる統合であれ、生活空間の統合であれ、その統合は人間が『善く生きる』ことを支援するものでなければならない」<sup>ix</sup>としている。これは今日極めて時宜にかなった主張であるが、モンテーニュの教育思想が目指した「判断力の育成」、「徳性の涵養」、「身体の鍛錬」が究極的に志向したのは、まさに、「いかに生きるか」であり、「いかにしてよく賢明に生きるか」ということである。そして、このことは今日の「教育」が当面している諸問題を解決へ導く一つの方向を示しているのではないだろうか。われわれは、特にこの点に彼の教育論の今日的意義を認め、注目しておきたいと思う。

## 注 記

- i 石堂常世、「モンテーニュ」 上智大学中世思想研究所編 『ルネサンスの教育思想（下）』所収 東洋館出版社 1986年 95頁
- ii Montaigne, M. E. de: *Montaigne OEuvres complètes (Essais)*, Gallimard, 1962, p.1079  
関根秀雄訳 『モンテーニュ全集7（随想録7）』 白水社 1983年 312頁
- iii 関根秀雄著 『モンテーニュとその時代』 白水社 1976年 79頁
- iv 同上
- v 同上書 92頁
- vi 同上書 93頁
- vii Montaigne, M. E. de: *Montaigne OEuvres complètes (Essais)*, Gallimard, 1962, p.173  
モンテーニュ著 関根秀雄訳 『モンテーニュ全集2（随想録2）』 白水社 1983年 95頁
- viii 同上書 98頁, *ibid.* p.174
- ix 関根秀雄著 『モンテーニュとその時代』 白水社 1976年 115頁
- x 同上
- xi モンテーニュ著 関根秀雄訳 『モンテーニュ全集2（随想録2）』 白水社 1983年 102-103頁。  
*Ibid.* p.176 なお、関根秀雄氏によると、父ピエールは、ミッシェルにラテン語早期教育を受けさせる場合もギユイエンヌ学院に入学させる際もこの校長に相談したし、入学後もミッシェルは、この校長にたびたび指導を請い深い影響を受けた。関根秀雄著 『モンテーニュとその時代』 白水社 1976年 135頁参照。
- xii 関根秀雄著 『モンテーニュとその時代』 白水社 1976年 137頁
- xiii モンテーニュ著 関根秀雄訳 『モンテーニュ全集2（随想録2）』 白水社 1983年 98頁  
*ibid.* p.174
- xiv 同上書 99頁, *ibid.* p.175

モンテーニュの教育思想

- xv 石堂常世, 「モンテーニュ」 上智大学中世思想研究所編 『ルネサンスの教育思想 (下)』 所収 東洋館出版社 1986年 108頁
- xvi フランス語の Essai には, 試験, 試み, 試作といった意味があるが, 彼の『エッセー (Essais)』は, 彼自身の生来の諸能力の「試し」とされている…『モンテーニュ全集2 (随想録2)』 42頁。Ibid.p.145.また, 『モンテーニュ全集3 (随想録3)』の56頁 ibid.p.289. にも, 『エッセー』が「判断の試し」であることが示されている。
- xvii 『モンテーニュ全集7 (随想録7)』 262頁, ibid. p.1052.
- xviii 『モンテーニュ全集2 (随想録2)』 31-32頁, ibid. p.139.
- xix 同上書 32頁, ibid.
- xx 同上書 54頁, ibid. p.151
- xxi 同上書 48頁, ibid. p.147
- xxii 同上書 24頁, ibid. p.135
- xxiii 同上, ibid.
- xxiv 同上書 24-25頁, ibid. p.135
- xxv 同上書 25頁, ibid. p.135
- xxvi 同上書 56頁, ibid. p.152
- xxvii 同上書 50頁, ibid. p.149
- xxviii 同上書 51頁, ibid. p.149
- xxix 同上, ibid.
- xxx 同上書 54頁, ibid.pp.150-151
- xxxi 石堂常世, 「モンテーニュ」 上智大学中世思想研究所編 『ルネサンスの教育思想 (下)』 所収 東洋館出版社 1986年 111-112頁
- xxxii 『モンテーニュ全集2 (随想録2)』 63頁, ibid. p.156.
- xxxiii 同上書 62頁, ibid. p.155.
- xxxiv 同上, ibid.
- xxxv 247 B.C.~183 B.C. カルタゴの将軍。202 B.C.カルタゴ本国を攻めたスキピオに敗れる。
- xxxvi 235 B.C.~183 B.C. ローマの将軍。ザマでハンニバルを破る。
- xxxvii 270 B.C.?~208 B.C. ローマの将軍。ハンニバルと戦う。ヴェヌシアで戦死。
- xxxviii モンテーニュ著 関根秀雄訳『モンテーニュ全集2 (随想録2)』 白水社 1983年 61-62頁, ibid. p.155
- xxxix 59 B.C.~A.D.17, ローマの歴史家。『ローマ建国史』を書く。モンテーニュは愛読した。
- xl 46?~120?, ギリシアの哲学者, 伝記作家。『対比列伝』や『倫理論集』を書く。モンテーニュは彼の著書を愛読し, 引用も多い。
- xli モンテーニュ著 関根秀雄訳『モンテーニュ全集2 (随想録2)』 白水社 1983年 62頁, ibid. p.155
- xlii 同上書 64頁, ibid. p.157
- xliiii 関根秀雄著 『モンテーニュ逍遥』 白水社 1985年 52頁
- xliv モンテーニュ著 関根秀雄訳『モンテーニュ全集2 (随想録2)』 白水社 1983年 65頁, ibid. p.157
- xlv 同上書 65頁, ibid. p.157.
- xlvi 同上, ibid.

- xlvi 同上書 66 頁, ibid. p.158
- xlvi 同上 ibid.
- xlix 同上書 67 頁, ibid. p.158
- l 同上書 71 頁, ibid. p.160
- li 石堂常世, 「M・E・d・モンテーニュ—近代教育論の源流—」 松島鈞編『現代に生きる教育思想 第3巻 フランス』所収 ぎょうせい 1981年 43頁
- lii モンテーニュ著 関根秀雄訳 『モンテーニュ全集2 (随想録2)』 白水社 1983年 71頁, ibid. p.160
- liii 同上, ibid.
- liv 同上書 73 頁, ibid. p.161
- lv 同上
- lvi 同上書 77 頁, ibid. p.164
- lvii 同上書 57 頁, ibid. p.152
- lviii 石堂常世, 「M・E・d・モンテーニュ—近代教育論の源流—」 松島鈞編『現代に生きる教育思想 第3巻 フランス』所収 ぎょうせい 1981年 47頁
- lix 同上書 44頁
- lx 白石克己, 広瀬隆人編 『生涯学習を拓く』 ぎょうせい 2001年 12頁
- lxi 同上書 10頁